The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	二〇二〇年度オンライン講義の取り組み報告
Author(s)	藤居, 岳人
Citation	中国研究集刊. 2021, 67, p. 100-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83260
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　菜号（第六十七号）　令和三年八月　一〇〇―一〇三頁

二〇二〇年度オンライン講義の取り組み報告

藤居　岳人

筆者は徳島県の阿南工業高等専門学校（以下、阿南高専と称する）に勤務している。勤務校において、二〇二〇年度に筆者がオンライン講義を実施するに当たってどのような取り組みをしていたのか。その状況を報告したうえで実施結果について考察を加える。

一　二〇二〇年度の勤務校における状況

年度当初は通常開講予定で、四月六日の入学式までは実施したが、新型コロナウイルス対応のために四月七日に予定していた始業式は四月二〇日に延期となる。さらにその始業式も緊急事態宣言の区域拡大によって中止となり、四月下旬からオンライン講義を実施することになった。形式としてはオンタイム型とオンデマンド型との二種類が可能との学校全体の方針が示されたうえで、四月中に実施方法に関する教員対象の講習会が開かれた。その他、適宜オンデマンド講義の動画データの圧縮方法などが校内情報として共有された。

そのうえで阿南高専ではmanabaというクラウド型の教育支援サービスを利用しており、科目ごとにページが設定され、学生が自宅等からmanabaにアクセスすることでオンライン講義が実施できるように体制を整えた。その前提として自宅等でのWi-Fi環境とパソコン等の所有が必須で、その環境にない学生には学校からポケットWi-Fiやノートパソコンを貸与した（その環境整備にやや時間を要した）。この体制構築によって、学生はmanabaにアクセスすることで講義情報やオンデマンド講義を自宅でも閲覧できるようになった。この体制で前期はオンライン講義中心に講義が実施された。

ただ、高専は工業系の学校であり、特に高学年学生にとっては実験や実習の授業が必須である。したがって、徳島県の新型コロナウイルス感染状況が比較的落ち着いていたこともあり、前期中に学年ごとに二週間程度の実験実習weekを分散形式で設定し、集中的に最低限の実験実習を実施した。

なお、後期になっても幸い徳島県の新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていたため、後期は全学年ともにほぼ通常どおりの対面講義を実施することができた。

二　前期におけるオンライン講義の実施状況

前期に四種類の講義を担当していた筆者は以下のように講義を実施した。科目ごとに実施概要を述べる。

（一）倫理（本科一年生〔高校一年生相当〕）
―オンデマンド型―

受講学生一六〇名。教室にビデオカメラを設置して、普段の講義と同様に板書しつつ解説している講義の動画を撮影した。一コマ九〇分の講義だが、学生が板書内容をノートする時間を考慮して全部で約六〇分の動画とした。また、その動画を内容のまとまりのよい箇所で五～六個に分割し、学生が途中で休めるように配慮した。動画はmanabaを通してYouTube上に限定公開し、本校の学生のみが閲覧できるように設定した。学生の出欠確認は、動画中の板書内容を自筆でノートしてもらい、それを写真に撮ったデータを期限を決めてmanaba上で提出させた（その後、登校可能になってからノート提出させて内容を直接確認した）。

多くの教員はパワーポイント等を使用した動画を作成してオンデマンド講義を展開しており、筆者のように普通の講義風の動画をオンデマンド講義教材として使用していた教員はごく少数派だった。そのため、講義内容のエッセンスのみのパワーポイント動画ではない筆者の動画はかえって学生には好評だった（学習内容だけでなく、普通の対面講義風に雑談等を交えた動画を筆者は作成しており、ある学生いわく「他の講義も、エッセンスだけでなく普段の講義調のものも、もっとあってもよかったと思う」とのことで、この種の声が多かった）。

（二）哲学（本科四年生〔大学一年生相当〕）
―オンデマンド型とオンタイム型との併用―

受講学生一〇〇名。前期全一五回のうち一三回は、上述の倫理と同様に、普段の講義と同様に板書しつつ解説を加える講義の動画を使用した。出欠確認は倫理と同様の方法で実施した。残りの二回はオンタイムでディスカッションを実施した。その二回は事前にそれぞれ別のテーマで学生に作文をWordで執筆してもらい、それを集計後、ＰＤＦ化して全員分の作文をmanaba上に配信する。そして、受講学生を四～五名のグループに分けてテーマを設定したうえで全員の作文をもとにGoogle Meetを使用してディスカッションを実施した。グループによってはかなり盛り上がったようである。全グループを筆者もひととおり巡回して議論に対するコメントをしたが、実施時にブレイクアウトセッション（Zoomでいうブレイクアウトルーム）の機能を知らなかったためグループごとの配信の手間が非常にかかって大きな負担だった。

（三）技術者倫理（専攻科一年生〔大学三年生相当〕）
―オンデマンド型とオンタイム型との併用―

受講学生二〇名。前期全一五回のうち二回は、上述の倫理や哲学と同様に、普段の講義と同様に板書しつつ解説を加える講義の動画を使用した。

出欠確認は倫理と同様の方法。残りの一三回はオンタイムで発表担当者によるプレゼンテーションを実施した。事前に発表担当者を決めて発表者作成のレジュメデータをmanaba上で全員に配付しておく。そのうえでGoogle Meetで発表担当者にプレゼンしてもらう（プレゼン内容は、たとえば「日本企業における内部告発の事例」や「ＪＣＯ臨界事故の事例」など）。発表に対するコメントや質問をチャットで学生にさせると、対面講義時よりも多くの質問が出てかなり議論が深まった。

（四）比較文化論（専攻科二年生〔大学四年生相当〕）
―オンデマンド型とオンタイム型との併用―

受講学生一七名。前期全一五回のうち一〇回は、上述の倫理や哲学と同様に、普段の講義と同様に板書しつつ解説している講義の動画を使用した。出欠確認は倫理と同様の方法で実施。残りの五回はオンタイムで中国語の講義を実施した。内容は四声や基本的な発音練習、簡単な会話のみ。受講学生が多くないので個人別に発音指導ができる状況だった。

三　オンライン講義の評価

新型コロナウイルス対応のために、急にオンライン講義の準備をする必要が出てきて苦労した点はどの教員も同様であろう。上述のように、阿南高専は後期になって対面講義が可能になり、学生の反応をよく見ることのできる対面講義の利点を再認識することができた。と同時にオンライン講義にはオンライン講義なりの利点をあることがわかった。その利点について、以下に二点述べる。

まずは上述の技術者倫理の項でも述べたように、ディスカッションするときのチャット機能の利用で、対面講義時よりもかえって議論が活性化したことである。昨今の学生は直接に他の学生に対して意見することをためらう気質が往々にしてあり、それが普段の対面講義時の議論が今ひとつ盛り上がらない原因のひとつである。普段からスマホ等を使用した文字によるコミュニケーションに慣れた学生からすれば、むしろチャットの方が率直な意見を出しやすいのではないかと考える。

もう一点はオンデマンド講義の利用についてである。演習等の講義では利用が難しいが、次年度にも利用できる内容のオンデマンド講義教材があれば、たとえば、こちらが出張等で不在にせざるを得ないときにすでに録画済みのオンデマンド講義教材を使用することで講義扱いにすることが可能ならば、教員の負担軽減にもつながるのではないだろうか。ただ、その場合、学校全体のコンセンサスや規則整備等が必要であることは言を俟たないであろう。

巷間よくいわれていることだが、二〇二〇年度の新型コロナウイルス対応は、大学や高専におけるこれまでの教育・講義に対する考え方を否応なく考え直す契機となった。これまでの講義形態の利点と欠点、また、新しいオンライン講義形態の利点と欠点があぶり出されるようになっている。二〇二一年度以降もしばらく新型コロナウイルス対応を継続せざるを得ない状況の下、今後、よりよい教育を如何に持続させてゆくことができるか。このことを考え続ける必要があるだろう。

藤居　岳人（ふじい・たけと）

一九六五年生まれ。阿南工業高等専門学校教授。専門は中国思想史、日本思想史。著書に『懐徳堂儒学の研究』（大阪大学出版会、二〇二〇年六月）、主要論文に「龍野藩の儒者と中井竹山と」（『懐徳』第八八号、二〇二〇年一月）など。